

時代遅れの原発への対応が津波被害を拡大

ニューヨークタイムス 2011年3月27日

福島原発の津波による災害は想定外と政府、東電はしているが、地震だけに注目し、津波を全く考慮しなかった日本の原発への対応が今回の大事故を生んだ原因である。

津波という言葉を生んだ日本は、これまでも大津波が何回も発生しており、これを原発の安全対策上、無視してきたことは信じられないことである。

福島原発は高さ13フィート、4.3メートルの崖の上に建てられ、これを超える高さの津波を想定してこなかった。しかし地震の多い日本周辺ではマグニチュード7.5級の地震でこれを軽く上回る津波がしばしば生じていたのである。今回の地震はマグニチュード9、津波の高さは想定3倍の46フィート、15メートルに達した。

2002年に非公式の安全対策諮問委員会が福島原発の津波への対策として、17.7 - 18.7フィート、5.8 - 6.1メートルの津波を想定すべきと勧告したのに対し、東電はポンプを20センチ上にずらしただけで済ました。福島原発では6メートルの防波堤を作ったが、台風は防げて今回の津波には何の役にも立たなかった。

最近の地震学はコンピューターのシミュレーションで大幅に進歩しているが、日本ではこれを予測に使わず、過去の地震のデータを読み取ることばかりに力を注いでいる。

南カリフォルニア大学の地震学の教授は、最新の予測技術を使わないとしても、過去のデータの分析から今回のような津波は十分に予測できたことであり、災害は大失態が招いたものだとしている。

米国では最新の地震学に基づき過去のデータにとらわれず確率的に起こりうる事態を予測した安全対策を取り入れているが、日本ではこうした手段はとられていない。

2007年の柏崎原発を襲った地震は設計の2.5倍の震度であったが、40年前の福島原発では設計上の問題もある。

1993年、奥尻島の地震ではマグニチュード7.8で30フィート、10メートルの津波が襲っている。

貞観の大地震、869年には福島一帯の1.6キロも奥地まで襲う巨大の津波が記録されている。津波は十分に予測できたのだ。

中山 隆